

入居者インタビュー

『今は亡き夫が選んでくれた施設で、幸せに暮らしています。』

江藤 明子 様（75歳）



＜主人に見守られて

仕事をしていた時代＞

結婚後も、デパートで販売の仕事をしていました。販売の仕事が好きで、誇りを持っていました。電話応対、包装、弁論大会（棚卸）などのコンクールではすべて優勝し、それを認められてトレーナーを任されました。

ちよūdōその頃、舅の具合が悪くなったこともあり、仕事を辞めようか悩みましたが、主人の「やるだけやってみたら。」という言葉で続けることができました。新入社員の教育、店内を回って販売員の

の応対やディスプレイ、ポップの指導など仕事も楽しく充実していました。そして、定年に



ご主人の育てたお花に囲まれて

なると、美味しいもの

食べて飲んで

日本制覇と

二人で北海道から五島

列島まで旅行を楽しみ

ました。

ました。

＜親の介護で学んだこと＞

足の悪かった父が寝たきりになり、5か月間姉と介護に通い実家で看取りました。父が亡くなると母の認知症が進んでしまい、兄弟姉妹4人でローテーションを組んで実家に泊まりました。「病院に行ったら家がわからなくなつた。」と役場から電話が来ることもあり、旅行に行つても気が気ではありませんでした。老健に入所しましたが3か月しか居られず、長期利用可能な療養型の施設を探し



ご主人と黒部ダムにて

ました。費用もかかりましたが、兄弟4人で負担しました。そして、入所してからも、週に1度は姉と会いに行きました。

＜主人を亡くし、

人生で一番辛かった時＞

温泉好きの主人が、広告を見て「ゆうゆうの里はどうか？」と言うので見学しました。入居するにしても2年後と思つていましたが、その2年の間にどうなるかわからないと言われて入居を決めました。

そして、入居して2年近く経つた頃です。主人が、突然の入院。私が作つたおにぎりとサラダを食べて、「美味しかったよ。」と言つてくれたのが最後の言葉になりました。翌日、意識不明になり、私は看病もしてきながら、ずっとこれまでのことを主人に話していました。あんなに泣いたことは無い。たった10日で逝つてしまった悲しみは、たとえようありません。

＜今は、みんなに見守られて、

充実した毎日を生きています＞

辛くてカラオケにも行けずに

いたら、仲間に「ご主人が好きだった歌でしょ。聞かせてあげなさいよ。」と言われたんです。主人は、みんなが歌うのを聞くのが大好きで、里のカラオケ大会では、お酒を飲みながら私の歌も照れくさそうに聞いていました。泣いていても主人は喜ばないと気づきました。

今は、カラオケ、卓球、パンフラワーの他に栄養学の勉強会に参加しています。海外研修にも参加し、先日は論文が入賞してスピーチをしましたが、仲間が3人駆けつけて「江藤さん頑張つて〜」と応援してくれたので、全然苦にならず発表できました。

今、不安なことはありません。姉や里の人達に守られているからです。主人が、ここを選んでくれて良かったと感謝しています。



研修でドイツにて